

小林力三物語



▲ タグボート大連丸の進水式。
左から6人目が小林力三社長、その左が高橋由松専務



▲ 見送りの人々にぎわった新潟港の日満航路。撮影は1940年ごろ

新・新潟運送船を誕生させた。専務には元税関支署長が就任した。余談だが同社は1942(昭和17)年、政府の戦時統制策により運輸部門だけが日本通運会社に併合され、日本通運新潟支店となり、今日に至る。

新潟運送船を退社したころから、力三を身内の不幸が次々と襲った。東京高商(現・一橋大)から三菱商事に入り大きな期待をかけていた長男享作(こうさく)が虫垂炎をこじらせて急逝。次いで東京帝大生の次男利策も結核で死亡。その一月後には父織邊(おりべ)も跡を追うように亡くなった。

小林織邊は西蒲原小吉村(旧中之口村)の農家の三男。病で幼時に失明したが、懸命に鍼灸医の技術を磨き、安政のころ江戸に出て浅草界隈でも名の知れた名医となって幕府御家人の娘菊と夫婦になった。二人の間の息子音蔵は浅草山谷町に生まれた、ちゃきちゃきの江戸っ子だ。菊の実兄荻原半之丞は新潟奉行所で広間役だったが、新潟在動中に病で没している。

戊辰・明治維新の混乱で織邊の家産が傾き、女房の菊も病で亡くした。その翌年1878(明治11)年夏、織邊は10歳の音蔵に手を引かれて三国峠の難所を越えた。めざした先は実家の西蒲原ではなく、亡妻の実兄が眠る浅からぬ縁の新潟町だった。古町13番町に居を定め、織邊は音蔵に勉学をと必死に働いたがかなわなかった。そんな父の姿を見て育った音蔵は終生の孝行を尽くした。

傷心の力三が再起を賭けて活動を始めたころ、新潟港にも大きな変化があった。念願だった港湾整備が信濃川大河津分水の完成で本格化し、1925(大正14)年から26年にかけて臨港埠頭、県営第一埠頭が相次いで完成した。それまでは東西に150㍍ほどの突堤が二本突き出し、高さ13㍍の灯台が1基あるだけの港とは名ばかりの哀しさだった。敦賀港が政府指定の一級港湾に選定されるのを

横目に悔し涙を流すしかなかった。それがようやく3千—5千トンの大型船が接岸可能になった。力三は撫順炭の輸入商として新島町通り3之町に住居兼用の店を構えたのである。さらには小沢七三郎の計らいで大連汽船の船舶代理店も新潟運送船から移管された。高橋由松専務は力三の右腕となって社業を支えた。石炭販売も順調に伸び、新潟石炭商組合を結成し、力三が初代組合長に推された。

新潟港を日満航路の拠点へ 押し上げた二代目

旧制新潟中学に進んだ力三の三男良介は、同級の坂口炳五(後の作家・坂口安吾)ら悪友の感化で、軟派な学生生活を謳歌した。ところが突然に兄二人が他界し、自身も結核のため旧制新潟高校を中退し療養生活に。家業のことなど念頭になかった日々が、1930(昭和5)年4月3日、父の急逝で一変してしまった。葬儀を終え取引先巡りをする中で、23歳の良介は二代目力三に改名する。初代力三が業界に培った信用力の重さを知り、その遺産をちゃんと背負って生きぬく覚悟を、力三襲名の形で示そうとした。

昭和の金融恐慌を経て、坂道を転がるように時代が急変しはじめた。発足当初は管轄機関の満州都督府の支配権からも自由だった満鉄経営であったが、関東軍が力を増すのに伴い植民地化政策の要として使われだした。1931(昭和6)年9月に柳条湖で満鉄線路を爆破し、それを合図に関東軍は満州全域を制圧、満州事変である。翌32年3月、国際連盟の警告を無視して、満州国の建国宣言を発した。

新潟港の周辺でも大きな動きがあった。1929(昭和4)年暮れ、ようやく清水トンネルが貫通して、東京への直通鉄道に道が開けた。2年後の31年9月に上野—新潟間が